

特集

MELON 環境大賞受賞記念講演

「第7回MELON会員のつどい」では、2001年MELON環境大賞に輝いた畠山重篤・石田眞夫両氏にそれぞれ取り組んだ運動を中心にして講演していただきました。以下その要旨をご紹介します。

畠山重篤氏

「森は海の恋人」運動と環境教育

私は本吉郡唐桑町で養殖漁業をしているが、その中で森林が大事だということに気づいて植林を続けている。森と海をつなぐ自然界に人間が関わっているわけだが、最も大事なものは人間の心の森である。そのために私はこれまで5,000人を超える子ども達を海に招いてきた。例えば海の中には大気中の50倍の二酸化炭素が溶け込んでいる。これを浄化する大森林が海の中にある。これが汽水域であるといったことを教えている。

*環境教育で変わる生活習慣

1キロのカツオを育てるには10キロのイワシが必要であり、そのイワシが育つにはその10倍のオキアミが、オキアミのためにさらに10倍の植物プランクトンが必要だ。食物連鎖であるが、これに人間の生活排水が重大な影響を及ぼす。こうしたことを学んだ子ども達は、朝シャンの水の量を減らしたり、自宅で使用する農薬の量に注意するようになったり、自分の生活を自主的に見直すようになっていく。

*笹かまにつながる海の大森林汽水域

日本を上空から見ると、3万本の川が流れ、それぞれの汽水域が形成されている。宮城県は七北田川、阿武隈川、名取川、鳴瀬川などの多くの川によって豊かな砂浜ができ、メロウドをえさとするカレーやヒラメが豊富に生息するようになった。笹かまが名産となったのもこうした背景がある。三陸のリアス式海岸も同様のことがいえる。



子ども達を受け入れ始めてから10年が経過し、最初の子どものほとんどはそろそろ大学生になる。今でも年間500~600人の子どもを受け入れているが、彼らが大人になった時に、本当の意味で宮城県が伊達な国になるのではないかなと思う。

石田眞夫氏

「蕃山保護運動と脱スパイク動」

脱スパイク運動に取り組んだ当初は、粉塵の原因として諸説あり、意見が分かれていたが、分析の結果スパイクタイヤが原因であることがわかってきた。私は公害対策弁護団の委員長として、発生原因を押さえないことには解決しないということで、スパイク対策委員会をつくることにした。



同委員会では健康被害でいくか、環境保全でいくか半年ほど議論が平行線をたどったが、前方が見えないほどの粉塵が健康に影響を与えないわけではないということで、スパイクタイヤを段階的に規制し、最終的には全面禁止する。これを県条例として行うべきであるという意見書をまとめた。

*“経済封鎖”でスパイク禁止へ

県条例ができてから、国の法律にならないかということで、スパイクタイヤの97%を生産しているタイヤメーカー7社を入れた公害調停委員会を設置した。この委員会で2年後の製造中止、3年後の販売中止、輸入の禁止などを決め、これに基づいて行政は立法化すべしという委員長声明を発表した。従って法律によってスパイクタイヤが禁止されたというよりも、調停委員会の場で経済封鎖をし、法律はこれを後追いしたにすぎない。

蕃山を守る運動でも、立ち木トラストという経済封鎖によって、開発を断念させた。しかし秋保大滝周辺の林道開発問題では、こうした経済封鎖をせずに、いわば理屈だけで中止させたもので、世の中が変わってきたことを実感した。

*環境保全の個別対応が21世紀の課題

開発業者による開発は、個人の財産権と絡み、環境保全と衝突してきた。環境保全は、理念であり、現行では個々の法律に対応できるようになっていない。都市計画法や森林法等に対応できるようにするのが21世紀の課題である。